

Title	アメリカの社会病理
Author(s)	丸山, 久美子
Citation	聖学院大学論叢, 16(2): 47-60
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=158
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

アメリカの社会病理

丸 山 久美子

Social Pathology in the United States

Kumiko MARUYAMA

As we approach the latter half of the twentieth century, many social problems have arisen on a scale that affects our world, especially in American society. There is vague anxiety everywhere in modern life, especially in family relationships. Presented here are results obtained from a survey of American university students on actual conditions in the days of 1983, considered in the light of extreme individualism, the base is for the American spirits and ethos. Problems considered include changes in family structure such as the fact that the traditional nuclear family of husband, wife and children is no longer considered to be the basic family structure in the U.S., due to new types of family structure, and such as gay couple families which include adapted children and children are reduced through artificial insemination, which are new beginning to be accepted, and so on.

This study highlights aspects that have a bearing on social life in the twenty-first century which are discussed from the viewpoints of clinical social psychology.

1 : は じ め に

20世紀後半のアメリカの社会は急激な文明の進展に圧倒され、その反動として様々な社会病理現象が勃発した。アメリカ建国時代から掲げてきた「ピューリタン精神」、「フロンティア精神」、「プラグマティズム(ヤンキーイズム)」等の3つのエートスはアメリカ人の精神の中に深く潜在化していたが、ある日、唐突にそれらの高邁な精神構造に異変が起きて、あるまじき否定的な形でアメリカ人の精神を根底から崩す事になったのである。それは極端な自爆作用となり、大きなうねりとなって世界を駆け抜け、世界の隅々にまで蔓延した。アメリカから発信され伝播した社会病理現象は日本社会にも多大な影響を及ぼしたが、実はこれらの根はアメリカを植民地にした西欧諸国の古い伝統や悪癖に由来するものと思われる。なぜ、アメリカ建国時代から培われた高邁な基本精神が20世紀後半になって、稀代な社会病理を生むことになったのであろうか。アメリカの歴史をひと

Key words; Gay Couple family, Artificial Insemination, Change in Family Structure, Single Families, Deputy Mothers

くと上記の3つのエートスの由来が明確になる。新大陸移民時代（ピューリタン精神）、東部・西部開拓時代（フロンティア精神、プラグマティズム）、南北戦争時代を通して第1次大戦後には3つのエートスの中に新たな倫理観が組み込まれた。享楽倫理（fun morality）と呼ばれるものである。そこで、これまで宗教色一色でまとまっていたモラルが「人生を楽しむことが生きている証」ともいえるヒューマニティ信奉に取って代わった。この種の行動原則は性的行動に変化をもたらし、これまで精神医学分野では「性対象倒錯症」といわれていた精神障害の同性愛を肯定し、ポルノの氾濫、麻薬中毒者の増加、エイズ発症に到り、男女は刺激的な関係を求めて巷をさまよい、一時的な性的関係を楽しむことが流行した。夫婦は新しい刺激を求めて離婚再婚を繰り返す、家族の団欒が犠牲になっていることにも無頓着であった。離婚件数が増加した1960年代から「アメリカの家庭は最早子供の教育に関し、伝統的に果たしてきた役割を果たすことが出来なくなった」とアメリカの教職員で組織する全国教育同盟が悲痛な声明を出した。1979年のことである。

ところで、西欧文明の思想的背景及び価値観の源泉は個人主義（Individualism）であり、東欧文化のそれは集団主義（Collectivism）であることが知られている。個人主義は集団主義や家族・温情主義（Paternalism）、全体主義の対極として論じられる。ある意味で、この主義主張は独立自尊を徹底させ、孤立化した個人に重点を置く傾向があり、表面的には自己中心的で他者排除の印象を与え、集団や組織とはなれて奇抜な振る舞いをする人に価値がおかれるようになる。従って、日本のように、官僚主義的組織社会とは一線を画する。又、個人主義は中世のコミュナリズムに対する反論として生じたルネサンスの中心思想であり、多くは宗教改革におけるプロテスタンティズムにより、その意味内容が明確になったものである。

ここに論ずるのは、個人主義を信奉するアメリカ社会に多発する社会病理現象を家族崩壊の実態に問題を絞り、臨床社会心理学的視点から多角的に考察したものである。

2：個人主義に関する若干の考察

個人主義の源泉をたどれば、古くはギリシャ哲学に由来する。Ryner（1920）によれば、個人主義の思想には大別して4つの流れがあるという。Epicurosの快樂説（Epicurian）、DiogenesやZeno等のストア学派によるストイズム（Stoicism）、Nietzの超人の思想（Nietzschism）、Tolstoi,Lの精神主義（Tolstoism）によって特徴付けられる個人主義の流れである。Hogan（1975）によれば個人主義の分類は前記とは大幅に異なる。それらを列挙すれば、浪漫的個人主義、自我的個人主義、観念的個人主義、疎隔的個人主義（Alienated Individualism）となる。個人主義の分類はともかくとして、個人主義という言葉が人口に膾炙され、その社会の生活信条になって定着したのはスネサンス期以降のことである。その後、個人主義の思想は宗教改革、科学の発達、資本主義の発展を支えたイデオロギーとして今日に至っている。従って、個人主義を問題にする時は、プロテスタンティ

ズムの信念、科学的合理主義の精神、経済的利益追求の競争原理を統括しながら、個人の意義、価値、主体性を取り上げて論ずる必要がある。

そこにおける原理原則はプロテスタンティズムの宗教的絶対神、科学合理主義的原理、資本主義的利益追求の原理であり、相互の緊張関係、競争原理を基底において自己確立に努めることが要求される。しかし、これらの個人主義が行過ぎると様々な社会問題を発生させ、社会病理現象を加速させる。宗教原理が偏重されると、個人の内的自制心の極端な重視を招き、個人の権利についての際限もない要求が「神の名」のもとに正当化され、信仰の良心の徹底が利己的に動機付けられた愛他主義 (Altruism) や偽善を生み出す。科学的合理主義精神や資本主義の競争原理なども度が過ぎれば、人間不在の偏狭な機械的思考や私利私欲に蝕まれた物質主義が台頭する。このような否定的側面があらわになると個人主義が婉曲に利己主義と同義に解されることになる。ちなみに、「広辞苑」には個人主義が俗に利己主義と解されていると説明している。かくして、高邁な個人の精神の原理原則であった個人主義の思想はいつの間にか利己的な自分中心主義や肥大化した欲望充足主義に転じ、ついには個人主義とは別種のナルシシズム (Narcissism) に変質する。ナルシシズムの原理はあらゆる制約から開放され、赤裸々な自己自身が世界の中心であり、自己は必然的に自らの欲望や感情を普遍原理と錯覚し、その折々の欲望衝動のままに行動する。かくして、極端な個人主義の行き着く先は、何者からも自由で制約されない個人の欲望充足だけが顕著になるため、利己主義の名称をも兼ね備える事になるのである。

Waterman (1981) によれば、個人主義は規範的、或いは倫理的な側面を具現するイデオロギーであり、それらは4つの特徴を持つという。すなわち、幸福主義、選択の自由、個人の責任、普遍性 (自分のみならず他者に対して正直で清廉潔白であること) である。これら4つの特徴を端的に言えば、個人主義を信奉する人は他者に利する人、他者にとってその行動の模範になる人、他者を信頼し、他者からも信頼される人、公明正大で自律心に富み、相互に協力し共同作業の相手を自由に選ぶ機会を常に持ちうる人 (Triandis, 1983)、つまり、個人主義を信条とする人は愛他的、利他的、人道的な人で他者には寛容であり、相手の立場や気持ちのよく理解できる共感性の強い人でなければならない。この見地に立てば、前述の原理がそれぞれ過不足なく全体に行き渡った中庸の人間像が個人主義国家の理想的人間とみなされるのが理解出来る。

古きよきアメリカ人という言葉をよく耳にする。これらのイメージの基本となるのはアメリカの独立運動を成功に導いた Benjamin Franklin (1706-1790) が奨励した人物像、すなわち、「古きよきアメリカ人」とは信仰が篤く正直で清廉潔白な人間の総称である。彼らは国家には忠誠を誓い、敬虔なクリスチャンであり、家にあってはよき夫であり妻であり、それぞれの役割に徹して子どもを育て、人類の平和を願い、時間のある限りボランティア活動をして人に奉仕するのである。後に Max Weber (1917) が「プロテスタンティズムと資本主義の精神」を執筆するに際して、アメリカの資本主義のエートスを分析する上で Franklin の信条を十分に活用したといわれる。彼の13の徳目

アメリカの社会病理

の中の「勤勉」と「節約」は、日本における江戸時代の思想家石田梅岩の石門心学で強調されたものである（柴田，1971）。

アメリカ建国時のアメリカ人は個人主義の原理原則を良く守り、その生活信条はピューリタンの責任倫理に基づいていた。このような宗教的責任倫理を核とする個人主義の本質は「個人と神」との徹底した関係から成り立つ道徳律を前提とする。

何かを決断するとき、個人は個人の決断の規範を神との対峙を通して獲得する。それは徹底した精神と精神との闘いであって、よほど強靱な精神力の持ち主でなければ耐え切れない。神の恩寵は精神力の弱いものには与えられないといわれる所以である。

アメリカの建国はこの意味において神と人との協力関係のもとに成り立ち、アメリカは『神に守られた正義と自由の国家』というアメリカニズムを生み出すのである。アメリカ揺籃期の人々は耐えざる努力の人であった。先祖のこのような歩みは時として、精神分析学者 Rollo May（1953）のネオ・ピューリタニズムといわれ、努力症候群（燃え尽き症候群）という社会病理を生み出す原因となった。

欧州からの独立を勝ち取ったときのアメリカ人は Franklin の徳目を良く守って成功への道を行んだ。今日は強力な資本主義国家を建国したのは、ピューリタンのキリスト教原理主義を信奉する信仰厚い人々が聖書の教えを良く守ったからである。マタイによる福音書25章14-30節で語られるイエスの教えはある主人が3人の下僕にそれぞれ資金を与え、それを如何に上手に処理するかを指示して旅に出る。旅から帰って主人は3人の下僕が資金をどのように増やしたかを見て、彼らに対してそれ相応に対応する。与えられた能力を最大限に生かし創意工夫することが出来るものに神の恩寵が与えられるから、節約と勤勉によって蓄積した資本を無駄にせず、有効に使用して最大の利益を獲得する事が彼らの目標になる。人々がこぞって畜産に励み、教会へ献金する。しかし、豊かになった教会は次第に組織的腐敗をうむようになり、物事が形骸化してゆく。これは何もアメリカだけのことではない。文明の円熟期には、あらゆる機能が飽食腐敗して停滞し、これまで大切に守られてきた文化や価値観に歪みが生ずるようになる。人々は倦み疲れ、魂は力を失い、外面は人工的に美しく飾られても、内部の魂は空洞化してどんな感動もなく、マンネリズムだけが跋扈する。疲れ切った人々は救いと癒しを宗教に求める。これがいわばひとつの時代や文化の終焉であり、第2の宗教時代に入ると歴史哲学者は述べている（Spengler, 1918）。だが、これは新しい文化の生まれ出る胎動でもある。

個人主義が深く浸透すると、自由な選択を個人の意志において強力で押し進めるようになるので、無意識裡に自ら掘った陥穽に落ち込むのである。即ち、自己の能力を過信し、弱肉強食の主張がまかり通り、不謹慎な競争原理の下で自らの野望を成就するために、あらゆる手段を弄して社会を席捲するようになる。自己主張が盛んになり、他者の言い分に耳を傾けず、他者への思いやりの欠如が目立ち始める。個人の思い込みだけで物事を過大評価し、他者とは相容れない分離した状態が持

続する。すると、人々は自給自足の生活を求めはじめ、国家のために労働する意欲を失い、国家生産力は落ち始め、脱産業社会の台頭によって、新しいモラルが確立され、閉鎖的な人間関係や疎外され孤立した人間が多数輩出するようになる。他者を全く念頭に置かない自己愛 (Narcissism) が未分化なままに台頭する (Lasch, 1978)。更に Privatism (Sennett, 1977), Selfism (Vity, 1977), Meism (Wulf, 1978) などの現象が巷を闊歩するようになる。個人は社会の枠外で一匹狼となり、華々しい功績を立てると社会の外で活動するアウトサイダーとして、彼らの意見は尊重されるようになる。アウトサイダーに賞賛の目が集まるのは誰からも援助を受けず、自己独自の能力を發揮して、個人の存在の確立を強固なものにしたからである。自分は自分、他人は他人の姿勢が強固なものになると、社会生活の中では表面的な付き合いだけとなり、他者不信が増大して冷やかな人間関係が日常的となる。家族関係も同様に一家団樂の時を持つことが少なくなり、それぞれが勝手に好きなときに食事をするので、家族全員が顔をあわせることも稀になる。こうした傾向に警鐘を鳴らして家族の重要性や家族解体の危機が叫ばれ始めると、反動的に家族は閉鎖的に寄り添い、いかにも親密で楽しい家族であるかのように演技するようになる。ここに、家族共依存症という社会病理を生じさせる温床が作られる。個人の権限が強まれば強まるほど悲劇的な人間不信を生み出し、他者への愛着を放棄せざるを得ない。家族は共依存に犯され、隣近所との付き合いも中途半端で、コミュニティ活動を阻害する事になる。

一方、個人主義の最終目的は幸福主義であるという。これは Aristoteles に代表されるギリシャ哲学の人生観や倫理道德の基本概念である。幸福主義とは、あらゆる自我意識やその行為の目的は自己の幸福の追求であり、それが人間の道德原理の基礎であると定義される。だが、この幸福という概念ほど多様な意味内容を持つものはない。自己の幸福を限りなく追求することが善であるとする倫理体系には多くの付加価値が随伴する。個人の幸福の目印が経済的満足であるとする衆目一致した前提があれば、確かに経済的な保障が各人の生活を便利なものに変え、個人の幸福が物質的な充足だけで満たされる。幸福とは満ち足りることである。何か不足しているとき、それを充足させるための行動が幸福へ近づく方法となる。個人の自由な幸福の追求が、全ての人の幸福に繋がるという原則が果たされている限り、個人の幸福は万人の幸福を保証する基礎となる。個人の幸福が万人一致して富の追求にあり、生活の便利性に求められるならば、個人は物質的充足にこぞって努力し勤勉に励み、自らの幸福を保証する富を他者にも分け与えつつ、全体の幸福が期待され、ひいては国家の繁栄をもたらす要となるであろう。そこで、社会福祉の充実が国家の繁栄の目印となり、弱者救済に多大の貢献をなすことになる。だが、反面それは、強者の労働意欲の喪失を招きかねない。Franklin の標榜する自助努力の精神がいつの間にか削がれ、福祉依存の体質が人々を蝕み、勤労の意欲が失われ、自らも福祉依存に加担するべく、様々な知恵を働かせて国家相手の犯罪を招来するようになる。なるほど、Freud (1953) は文化の発達は人間の幸福を保証するものではないという。だが、人間の価値判断は無条件に彼らの幸福願望に支配されている。いかなる栄華栄達の道

を歩いているように見えても、本人が心から幸福であると感じない限り、それは不毛の荒野を歩いているに等しい。文化の発達が人々の生活を豊かにしたとしても、人の心は癒されず、憂いがいや増す。豊かさの極限にある人が無制限の自由をむさぼり始めると、個人の幸福の代償として、他者との連帯の喪失に繋がる。家族崩壊、レイプ、幼児虐待、性的放縦、麻薬中毒、ゲイ（同性愛）、奇怪な新興宗教が跋扈する。物質の充足によって反動的に生ずる危険な精神主義の台頭である。もし、現今のアメリカの社会病理現象が、こうした成り行きで生じたものならば、この時代の推移を割目して真摯に分析し、次代の橋渡しとなるべき啓蒙思想を編み出してゆくことが重要である。

3：病めるアメリカの胎動

かつて、ロシア革命勃発の前期、すなわち、19世紀末不安と反動の時代を生きていたロシア・インテリゲンチアに属する青年たちはその暗い鬱積した虚無的な気分から逃れるために、革命の成就と道徳的退廃、宗教的憧憬の3つの道のどれかを選択したという。当時、道徳的退廃の道を象徴する社会現象としては、反逆的享楽主義文学の勃興、特にサーニズム（Artsybashev, 1903）という風潮が興隆を深めていた。政治的権利獲得闘争を軽蔑し、無節操な欲望満足という個人の幸福の追求を目指す生き方である。宗教的憧憬とは神秘的色彩が強く、夥しいロシア正教の勃発、宗教文学が興隆を極め、人々は怪しい宗教熱に犯され、安易に自殺し、殺人さえも肯定した。現在で言えば、日本のオウム真理教の類で、人を殺して救済に預かるというものである。サーニズムを信奉する青年たちはあらゆる道徳的退廃や性的放縦に飽満した後、平然と厭世自殺をする。宗教的憧憬に活路を見出した青年たちはあらゆる呪術、悪魔礼拝を信奉するにいたった。ロシア革命は1917年に成就し、ロマノフ王朝は崩壊したが、その間、ロシアは国の内外の戦争に疲弊し、30年もの間こうした悲劇時代を存続させていた。後に、マルクスレーニン主義を逆手にとったスターリンの独裁政治が70年間持続することになる。

様々な社会不安と混沌の中にある社会において、明日の見通しもつかず、夢も希望も失った青年達はどのような生き方を選択するのだろうか。アメリカ社会は1960年以降、様々な社会不安現象が人々を退廃的モードに落ち込ませ、ヒッピーが横行し、同性愛が高まりエイズの発症を促進し、家族崩壊が広まっていた。1980年代になると、社会の風俗は乱れ、極く普通の服装で歩けば無頼漢に襲われるという危険が付きまとい、まともな様相で外出も出来ないという剣呑な社会状態となった。

そのような社会的状況の最中、アメリカの大学に在学する大学生904名（アメリカ中西部のイリノイ大学、東部のカリフォルニア大学アーバイン分校）を対象に行った社会的危機意識の調査の結果の一部を以下に述べる（丸山，1985）。

表1は混乱した社会の中での4つの生き方について、男女別に見た大学生の反応比率である。それによると、正義感にあふれた大学生一般の革命志向はどの国においても同様である。（但し、日本

アメリカの社会病理

は何もせずに成り行きにませる成り行き志向が大勢を占める)。更に、宗教に依存する傾向が女子学生に多い。アメリカ社会は、今や道德退廃の渦中にあると印象付けられている。しかし、中西部、東部の大学に学ぶ大学生にはこの傾向は強くない。彼らの精神的向上心は強く、革命が宗教活動のいずれかの生き方を選ぶので、アメリカの大学に学ぶ大学生はアメリカ的国民性に依存した気質の持ち主である。又、ピューリタニズムの伝統に従い、「神の国」の正義が貫かれていると信ずるアメリカ人の若者の姿勢において宗教的態度に男女差がみられる。

表2は家族関係が崩壊しつつあるという社会現象に対して、今後家族の形態はどのように変容して行くのかを問い、その回答表を示したものである。それによるとアメリカ人の大学生は1982年当時、既に家族の形体の変動を予測したものが半数はいたことになる。アメリカの家族はその時代の中でどのような変容を遂げたのだろうか。1950年代は所謂『古きよき時代』を象徴する一家の稼ぎ手の父親、専業主婦の母親、二人の子どもという核家族構成が典型的であった。しかし1960年代になって、これまでの伝統や性的関係からの解放が叫ばれ、大きなうねりとなって女性解放運動に発展し、1970年代はヒッピーの誕生とともに非婚や離婚は自立した女性の象徴となった。女性は母親になることよりも自分のキャリアを重視するようになった。しかし、このような社会風潮への批判が高まり、キャリアだけではなく、家族のあり方を見直そうとする風潮が起こり始めた。キャリアだけでなくパートナーや子どもとの関係を見直すという風潮である。なかなか子どもの生まれないキャリアは猛烈な勢いで進歩した生殖技術に注目し、自分の家族もその恩恵にあずかろうとする。人工授精、代理母、卵子提供による人工授精などの生殖技術は、彼等を何処の誰とも分からずとも

表 1

What would you do if the world fell into chaos, causing a majority of people to lose hope and ambition for the future? 混乱した社会の中の生き方	M (男)	F (女)
A : Seek your own pleasure, not worrying about reality. (快楽志向)	16.7	11.2
B : Attempt to reform and improve the world. (革命志向)	55.7	52.2
C : Pray to God and ask for deliverance from the Chaos in the world. (宗教志向)	17.7	32.7
D : Do nothing in the state of Apathy and let fate take its course. (成り行き志向)	9.9	3.8

表 2

How do you think the family structure will change in the future? 家族構造の変動の予測	M (男)	F (女)
A : The structure of the traditional nuclear family will continue to disintegrate thus causing new types of families to develop. (新家族の誕生)	52.4	48.5
B : Family relationships will return to the traditional nuclear structure. (伝統的な核家族への回帰)	40.6	43.8
C : As people continue to be confused the family itself will cease to exist as a social unit. (家族は存在しない)	7.0	7.7

良いから、とにかく自分の家族に子どもが欲しいとの一念で子ども獲得に奔走させた。

1990年代になるとアメリカの家族はさらに多様化の速度を強めて行った。養子縁組はこれまでよりももっと開かれたものとなり、海外の子どもがアメリカの家族の一員となった。卵子提供や代理母が急増した。ゲイ・カップルやレズビアンも家族を築き、子どもを育てる権利を得たのである。これまでは、不妊夫婦のための生殖技術や養子縁組制度であったのが、非婚カップルやゲイ、シングルにも子どもを持つことが許されるという大きな夢に拍車をかけ、それが実現したのである。

このような社会現象によって、無際限に広がるアメリカの家族の変貌は家族構成員である子ども達の心的外傷（トラウマ）となってアメリカ社会の現実を複雑なものにしている。

児童精神医学の見地に立てば、子どもの成長過程において、父親が2人、或いは母親が2人の家庭に育つことによって、将来その子どもの性的志向に偏重をきたす恐れがある。

今後の長期間のデータを見なければ明確なことは言いえないが、明らかに子供の発達過程における父親と母親双方の存在は、どんな社会的変動が起ころうとも重要な要素になるからである。

アメリカの家庭の崩壊の原因は一体何処にあるのかを15項目にわたって調査した結果、賛成率の高いものから順に10項目並べたのが表3である。男女差は見られない。家族崩壊の原因は「性的関係が自由」、「宗教心の希薄さ」、「男女の愛情本位の結婚」、「女性解放運動の興隆」、「離婚法の改正」が上位5位まで上がっている。表1にみられるように彼らの生き方には道徳的退廃の道を選ぶ人は少ない。サーニズムは彼らの生き様にはあまりにも暗すぎる。彼らは世界が混迷するときには、保守主義であれ、革新派であれ、革命志向で正義のために闘う姿勢を明確にする。その生き方において、男女差が見られるのは宗教的憧憬で女子学生にその道を選ぶ率が高い。アメリカ青年の道徳的退廃が叫ばれているにもかかわらず、1983年に実施したアメリカ中西部の学生たちはサイレント・マジョリティであり、マイナーな不道徳な人々から隔離されていたのかもしれない。

しかし、性的関係の自由（同性愛の肯定）がもたらした家族崩壊の現象は宗教においてもその聖書の解釈によって同性愛を肯定する牧師が増加したり、アメリカのピューリタンの典型であるメソジストの牧師が同性愛であるために、宗教界に波紋を投げ、問題提起の契機となった。しかし、今日、家族崩壊の問題は宗教とは何の関係もないところで、その原因を作っているのである。

アメリカの家庭の崩壊が行きすぎた個人主義であるとする見解は、日本的発想であるという反撃に出会う。個人主義を徹底させることが最高の価値であるとする彼らの考え方の中には、個人主義が利己主義と結びつくことは含まれていない。これらの調査では行過ぎた個人主義の故に家族が崩壊するという考えは毛頭なく、それに賛成したのは37.9%で反対の比率は44.6%である。個人主義は俗に利己主義とも言うという「広辞苑」の解説は否定される。長い間、個人主義は真面目で思慮深い人々の旗印であり、正義と改革を支える倫理的規範であった。だが、今世紀になって、様々な社会思想家は個人主義に関連して、それを社会的衰退の指標とするようになった。個人の自由な意志決定が家族や社会的共同体を解体させる起爆剤となるからである。アメリカは神の名において、

アメリカの社会病理

表 3

Indicate whether you agree or disagree with each statement of family relationships. 家族関係崩壊に関する将来予測	M (男)	F (女)
1): Since relationships between the sexes has been become less inhibited, social pressure to marry has decreased. (性的関係の自由)	70.1	69.6
2): People have become less religious-oriented and more self-centered. (宗教離れ)	61.6	58.3
3): Having children is no longer the motivation to marry, instead couples consider living together has manifestation of love. (結婚の形態の変化)	56.6	66.4
4): The rise of women,s awakening has undermined traditional family roles. (女性解放運動)	50.5	48.0
5): Liberal divorce laws contributed to the disintegration of family relationships. (離婚法の改定)	48.4	53.0
6): Feelings of trust between husband and wife have decreased greatly in recent years. (夫婦間の不信)	46.8	45.8
7): People believe they need to be doing something new all the times in order to be happy. (新奇なものへの好奇心)	44.8	41.7
8): The traditional nuclear family of husband , wife and children is no longer considered the basic family, new types of family structure are beginning to be accepted. (家族形態の変化)	44.3	43.5
9): As the result of the important of individualism (the attitude of [Me] first), compatibility among family members has decreased. (行過ぎた個人主義の台頭)	38.8	36.9
10): Parents and children have become increasingly alienated, thus reducing parental confidence in educating their child. (子供の教育への親の自信のなさ)	31.2	30.0

その自由の保証をいつの間にか傲慢に受け止め、放恣に解釈し、人間性をおろそかにした放縦な気候さははびこらせた。かつて、個人主義思想が人々の魂に清冽な息を吹き込み、多くの貴重な文化遺産を残したとき、人々は勤勉でよく働き、日々神への感謝の祈りを忘れず、永遠の命を信じて正直に励んでいた。誰一人神にそむくものも、厚顔に自己主張をする他者の存在もなかった。隣人愛が徹底し、苦悩し疲れている者には豊かな愛の手が差し伸べられた。今日のアメリカの得体の知れない狂気は何処から来たのであろうか。

4 : 20世紀末の病めるアメリカの実像

20世紀末のアメリカの社会病理現象を家族関係に限って考えてみたい。勿論、21世紀初頭、アメリカはテロの脅威に翻弄され、現在もイラク戦争でテロの執拗な攻撃に疲弊している。世界がアメリカの独断専行を非難し、テロ撲滅の機運が霞んでいるかに見える。アメリカ社会全体が驚くべきテロ攻撃に怯えてとんでもないことを仕出す様な印象さえ持たれ始めた。このようなある種の奇妙な強迫観念的行動をアメリカ病という。

アメリカの社会病理

18世紀後半、産業革命に成功したイギリスが、その後気づいてみるとあっという間に衰退の道を走っていた、これを人々はイギリス病といった。それと同じようにアメリカは次第に何か不気味な正体の知れない強迫観念の下に、日々の生活を営んでいるように見える。

常に競争社会の原理に突き動かされ、職場ではくたくたに疲れて帰宅した男がストレスのあまり家族に暴力を働くか、なおもストレスを抑圧して幸せな家族を演じ続け、ついには一家惨殺の危機にまで追い詰められる。聖書の教えを忠実に守るために人工中絶した医者を撲殺する(矢部, 2003)、差別撤退を名目に率直な議論やユーモアを奪ってしまう倫理的、かつ見せかけの正義、肥満を極度に嫌い、職場では肥満した人を雇わない、拳銃の果に、肥満したのはマクドナルドのせいであるとして訴訟を起こす人達、肺がんになったのはタバコ産業の売り込みのせいであるとして訴訟を起こす人達、銃社会の中で銃が危険なものであり、日常的に殺人事件が発生しているにもかかわらず、銃は自由と民主主義の象徴であり、これなしには安全が保証されないと主張する人達、精神科のクリニックが繁盛し、カウンセラーを志望する学生たち、等々、枚挙にいとまがない。

確かに、家族形態の変化をもたらした同性愛の男女の結婚や女性解放が生み出したシングル・マザーの増加などは生殖技術のめまぐるしい発展に原因がある。日本では、生殖技術を規制する法律はない。だが、アメリカのように同性愛の男女の結婚が許されるという制度がない以上、同棲した同性愛の家族に子供を養子に迎えてまで家族を構成しようとする意識はまだない。同性愛そのものを忌避する日本人のモラルはまだ健全ではないだろうか。

日本はエイズに結びつく同性愛者のカップルの数は全世界で最も低い。日本には行過ぎた生殖技術に対する歯止めとなる法律がない。一方、西欧主要国であるドイツやフランスでは1980年代から代理母出産禁止法が立法化されている。

スウェーデンでは精子・卵子提供による体外受精や代理母出産禁止法が立法化されている。イギリスでは卵子提供や代理母出産を認めてはいるが、それをビジネスとする事にたいする歯止めとして斡旋禁止法が制定されている。しかし、アメリカではアメリカ生殖学会などから、とりあえずガイドラインを設けてはいるものの、連邦レベルでの規制がない。そのため、精子・卵子提供、代理母出産は野放しの状態である。州レベルでの規制がなければ、禁止法のある州での出産を断念しても他の州に行けば念願がかなう。このような状態で、精子・卵子提供で、年間9万人の子供が生まれている。1970年代から始まった代理母出産は1990年代から急速に進んだといわれる。精子提供よりも卵子提供が1990年代になって増加したのには以下のような事情のためである。精子・卵子提供や代理母出産は有料であり、不妊治療はアメリカでは巨大産業へと成長した。卵子提供や代理母出産は精子提供よりも高額である。卵子提供や代理母出産は富める女性の富めない女性に対する生殖能力の搾取であるといわれている。それほど、卵子提供や代理母出産の報酬は高額である。このように生殖時術の実行によって生まれた子供たちの行く末、依頼した親の心理状態、顕微授精(精子を卵子の細胞質に注入して、受精させる生殖技術)や代理母出産によって生まれた子供に何らかの

障害が生ずる可能性がないとはいえない。今後の課題は生殖技術の更なる発展に伴って山積する様々な課題を如何に処理するかにつきるが、この種の問題を議論しないままにアメリカでは生殖ビジネスが一人歩きし、家族は変貌するのである。

精子・卵子提供・代理母出産によって生まれた子供は生みの親を知らされず、育ての親の養子となってこの世に誕生する。何故、自分は決して生みの親を知らされないのか、養子の子供が自我に目覚めて自分のルーツを知りたいと欲したときに、何処の誰とも分からない自分の存在に疑問を感じ、並大抵ではない傷みを心に感ずるようになる。様々な手続きを経て、養子縁組が決定した子供は、生みの親を知らされず、父親が二人（男性の同性愛）、母親が二人（女性の同性愛）、母親しか居ないシングルマザーの家庭にそれぞれ引き取られてゆく。まだ、成長した子供の自分の家族に対する意識や心理状態を明確に示すデータも研究もまだなされていない。離婚・再婚を繰り返した家族の中に子供への性的虐待による人格障害がとり沙汰されている。Frued 的に考えれば、子供はたとえどのような状況にあっても、5歳までは父親と母親がともに仲良く暮らし相互に接することが望ましく、男女の区別が分かり、その役割を知ることができるまで、子供には父母が必要である。同性愛の一方が母親、または父親役をしても、子供は彼らの身体的接触の感覚で、物事を判断する故に、父母の愛情の示し方の微妙な差異を感知できない。同性愛の親に育てられた子供が、その後どのような運命を辿ったのかを研究した資料がまだない。友人関係、同姓・異性の大人との人間関係、性的指向に対する混乱など、他の普通の親に育てられた子供との比較を行った研究において、両群に大差はないと言われているが、サンプル・サイズの関係で、まだこの種の研究には確かな決め手がなく、未確認部分が多い。従って、現在のところ、ゲイの親が子供の親として相応しくないという根拠は何処にもない。最も先鋭的なフェミニズムの見解によれば、「現在のアメリカでは父親と母親の性役割分担が曖昧になっている。母親が子供の自立を阻害するので、子供の自立を促進するのは父親の役割である。しかし、今日では母親にも子供の要求の変化に対応する能力はあり、必ずしも子供の自立を妨げることにはならない。幼児が一体化する相手が母親である必要はなく、それを母親一人に限定する必要はない」ということになる。

今日では、性的指向は環境的要素よりも遺伝的要素のほうを優先して考える傾向があり、性的指向は既に生まれたときから定まっているとする見解が強い。

確かに、20世紀初頭まで、性的指向は『遺伝』が原因であり、従来の精神医学では同性愛に性対象倒錯症という病名をつけていた。この問題は一族にとって不名誉な醜聞となり、そのために表面だけをつくらって結婚させ家庭を作り、子供が不自然な父母と暮らす不幸には目を閉じていた。同性愛は治療を必要とする精神病ではない。性的指向が異なるだけである。従って、ゲイ・カップルの親に育てられた子供が同じようにゲイになるとは限らないということになる。

1996年、ハワイ州では、ゲイ・カップルの結婚の申請が提出されたとき、州はその申請書を却下した。そこで、彼らは州を相手に訴訟を起こした。紆余曲折の結果、1996年にホノルル地裁は同性

愛の結婚を認める判決を下した。州政府は上告し、最高裁の判決が下され、ハワイ州における同性愛の結婚が認められた。同性愛の結婚が合法化されると、他の州のゲイ・カップルが押し寄せてくることが懸念され、連邦議会は、同性愛の結婚を認めない「結婚防衛法」を成立させ、この法律で他州から押し寄せる同性愛者の結婚を認めない権利が各州に通達された。ハワイ州議会も同性愛の結婚を阻止するために、州の憲法を修正する動きを見せ、住民投票の結果、賛成多数で憲法改正が行われ、同性愛の結婚は認めない事になった。この事件を契機にアメリカのヴァーモント州では2000年、州として始めて「結婚」と同等の法的権利を認める「市民的結びつき (civil union)」という制度を定め、同州最高裁が相続権から健康保健に至るまで、ゲイ・カップルは配偶者と同等の扱いが認められるとする判決を下した。ゲイ・カップルのための結婚は「聖なる結びつき (holy union)」といわれ、ゲイのキリスト教信者のためのユニタリアン派教会は、彼らのための結婚式を挙行するにいった。

このようにしてアメリカの家族構造は一層複雑になったのである。しかし、アメリカのように多様化した他民族国家ほど、何らかのコミュニティに所属したいという願望の強い国民はいない。

流動的で多様化した社会の構成員は緊張感や孤独感が強い。18歳になると親元を離れ、自立するように育てられた子供は人に頼らず独立自尊の生活を余儀なくされ、諸般の挫折や人間不信と傲慢さの故に、人への信頼感が希薄になり、訴訟社会が華々しく展開する。

これが、アメリカの現状である。彼等は皆となるものがほしいので家族を大切にしたいと熱望する。家族に癒しを求め、必要以上の期待感を抱く。そこに共依存家族が増大する。家族は自分の居場所を与え、疎外感や孤独から自分を解放してくれる。しかし、期待すればするほど家族関係の崩壊が起こり、ストレスが高まり家庭内暴力 (DV) という社会病理現象を招いてしまうのである。

1990年度の日米青少年の意識調査によれば、アメリカの青年が求めるものの第1は「人生において最も大切なものは暖かい家族、幸せな家庭生活」である。離婚・再婚を繰り返す親の元で育った子供は暖かく幸せな家庭生活を渴望する。

このような背景を踏まえて、今後家族関係がどのように変貌するのかを問えば、表2から予測されるように、核家族は崩壊し、新しい家族が生まれる。しかし、再び核家族へ回帰するという期待も同じように予感している。男女ともにこの結果に有意差はない。さすがに家族と言うこれまでの社会的単位は存在しなくなるという意見は少数である。21世紀になって、再度これらの調査をすればどのように回答が変動するのか、今後の研究に期待したい。

5 : お わ り に

常にカウンセラーを必要としているアメリカ人は高額な治療費を払っても、メンタル・クリニックの扉をたたく。アメリカ人には結婚生活とは『いつも明るく幸せそうな家庭でなければならない』

という固定観念がある。何をしても常に『家族』を強調する。特に中産階級の家庭ではこの傾向が強い。1980年代のアメリカにおいて、ロス・アンジェルス、サンフランシスコ、ニューヨークなどの大都市の周辺に集まる青年男女の群れが、多くの社会病理問題を引き起こした。家族を失った「家なき子」の群れ、ゲイ・ピープル、麻薬中毒患者、レイプや家庭内暴力が頻発し、家族を捨てて子供と共に「ウーマンズ・ハウス」に逃げてきた女性達、エイズに罹患した同性愛の患者達などマス・メディアは挙ってこれらの社会病理現象を報道した。家族消失の危機を覚える現象は、アメリカ社会の将来を暗く覆った。だが、この現実は大都市周辺で起こる極く少数派の引き起こした事件であり、アメリカを支えているのはそのような少数派ではなく、多数派を占めるサイレント・マジョリティ（多くは郊外の田園都市、大学都市などに居住する中産階級で伝統的な気風を尊重する保守派の典型的アメリカ人）であり、彼らがアメリカの少数派の危機的状況を救うと考えていたのは1980年代以降であった。だが、当時の若者は田舎から都会へと繰り出して、同性愛の仲間に加担し、エイズに罹患する。1990年代になると最早何がおきても驚かないという彼らに消費産業の付けが回って国家財政の基盤が揺らぎ始めた。すると彼らは経済的成功を勝ち取ることに夢を持ち、何よりも沢山の物、自動車、大きな家、自家用飛行機などを幸福のシンボルとみなし、社会的地位や権力を握るための熾烈な戦いを始めた。そのために、内にあってはストレス、暴力、社会的人格障害、人間関係に亀裂が入り、家族は他人の巣のように味気なく、見知らぬ他人の住む不気味な集団となった。人々は摂食障害を患い、肉体美妄想にかられて、ダイエットに苦心し、栄養失調で衰弱し、豊かさを勝ち取る特権は白人の裕福層（WASP）に限られてしまい、成功した黒人は白人になるために整形手術をするという人種差別撤廃などは全く無視した社会に戻ってしまったかの感じがする。アメリカ建国時代の理想は、20世紀の後半からくずれはじめ、アメリカ病という文明のなれの果ての姿をさらけ出してしまったのである。

文明の進歩は人を豊かにする反面、多くの困難な事態を招来する。豊かさの陰にある精神的荒廃が魂を砕き、人間は相対的に「屋根裏の哲学者」を渴望するようになる。このようにして、人間が内省的になればなるほど、多くの発明発見を生み出す原動力になることは疑いのない歴史的必然である。アメリカもまたあらゆる意味で多くの難題を抱えているとしても、やがて来るべき未来に明るい展望が開ける事を期待せずにはいられない。

参考文献

- Artsybashev, M., Sanin Ltechworth: Bradda books 1903 (M. アルツイパーシェフ著、中村白葉訳：「サーニン」上下、岩波文庫、1929)
- Bakan, D., The duality of human existence. Chicago: Rand McNally, 1966
- Franklin, B., Memories. London: Robinson edition 1793 (B. フランクリン、松本慎一、西川正身訳、「フランクリン自伝」、岩波文庫、1957)
- フロイト, S., 土井 訳, 文化論, フロイト選集6, 日本教文社, 1953
- Hogan R., 「Theoretical egocentism and the problem of compliance」. American Psychologist, 30, 533-540.

アメリカの社会病理

1957

Hofstede, G., *Culture's consequences*, CA: Sage 1980

井門富士夫, アメリカ宗教の体質 ピューリタニズムとの関連について, 「講座 アメリカ文化 1」, 南雲堂, 1969

Lasch, C., *The culture of narcissism: American life in an age of diminishing expectation*. New York: Norton 1978

岡田光世, アメリカの家族, 岩波新書, 2000

小此木啓吾, 自己愛人間, 朝日出版, 1981

松尾邦之助, 近代個人主義とは何か 現代のソクラテス哲人 Han Ryner の個人主義, 黒色戦線社, 1984

丸山久美子, 個人主義の倫理, 「盛岡大学紀要」第4号, 65 - 72, 1984

丸山久美子, 米国大学生の死生観の構造, 「盛岡大学紀要」第5号, 61-77, 1985

丸山久美子, 20世紀末現代日本社会の光と影, 「聖学院大学論叢」第7巻第2号, 146- - 158, 1995

May, R., *Man's search for himself*. New York: Norton, 1956

作田啓一, 個人主義の運命, 岩波新書, 1984

Sennett, R., *The fall of public man* New York: Knopf, 1977

柴田 実, 石門心学, 「日本思想体系」42, 岩波書店, 1971

Spengler, O., *Der Untergang des Abendlandes: Umriss einer Morphologie Der Weltgeschichte.*, Wien: Wilhelm Braumuller, 1918 (O. シュペングラー著, 松村正敏訳「西洋の没落」上下, 東京: 五月書房, 1977)

祖父江孝男, アメリカ人とはなにか, 「現代のエスプリ アメリカの再検討」No. 191, 89-94, 1982

Triandes, H. C., *Collectivism VS individualism: A reconceptualization* Technical Report. Department of Psychology, Illinois: University of Illinois 1983

Vitz, P. C., *Psychology as religion: the cult of self-worship*. Michigan: Erdmans 1977

Waterman, A.S., 「Individualism and interdependence」*American Psychologist*, 36, 762-773, 1982

Weber, M., *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, Tübingen: Verlag von J. C. B. Mohr 1904 (M. ウェバー著, 阿部行蔵訳, 「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」, 東京: 河出書房新社, 1917)

矢部 武, アメリカ病, 新潮新書, 2003年

山本七平, 勤勉の哲学 日本人を動かす原理, P H P 研究所, 1979

山崎正和, 柔らかい個人主義の誕生, 東京: 中央公論社, 1984

脇山 俊, 悩むアメリカ この成熟社会に巣食う病根, 「現代のエスプリ アメリカ再検討」, No. 191, 172-180, 1982